
I S 転生の翼

御坂弟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生の翼

【ISBN】

98657X

【作者名】

御坂弟

【あらすじ】

神の手違いで死んだ俺は神から転生させてもりえる事になった。

文章力が無いですが宜しくお願ひします。

プロローグ（前書き）

あまり小説を書いた経験が無いのでへたくそですが宜しくお願いします。

プロローグ

とある日の夕方

「ふう、やっと新作のプラモが買えたぜ。」

「さっさと帰つて作り始めるか。」

俺は最近出た新作のプラモが買えて調子にのつていた
そんな俺の視界に横断歩道の上で座っている猫が入った
そしてそのまま車が迫つていた

「なつ！ アブねえ！」

俺はとつさに猫に走りよつ、横断歩道の向こうまで投げ飛ばした

ドンッ！

猫を投げ飛ばした俺は猫の代わりに車にはねられた、
そして徐々に視界が薄れて行く中、思った

『せめて、これを作りたかったな。』

そして俺の視界は真っ暗になった

プロローグ（後書き）

ぜひ次も宜しくお願ひします。

神様（前書き）

連続投稿です。

『俺は田が覚めると一面真っ白な部屋だった

「なんだこ、心理の扉でもありそうだな。』

『そんなものは無いよ』

『うわあっ！何時からいたんだよ。』

俺の後ろにいかにも神ですみたいな人がいた

『みたいなじや無くて本物だよ。』

『ええっと、俺死にましたよね？』

『ええ、あなたは猫をかばって死にました、しかしその猫が私の親友のペットだつたのです。それで彼がキミを転生させてほしこと言つてまして、あなたが行きたい世界に転生される

ことになつたのです。』

『マジですか？』

『マジです。』

『どこでもいいの？』

『はい、どこでも良いです。』

「じゃあ、E.Sの世界が良いです。」

『ええっと、体などはどうします?』

「じゃあ、体はh a c kのハセヲで身体能力は最高まで、E.Sは俺の知ってるガンダムの機体で。」

『わかりました、それではあなたを原作開始の少し前に落とします。』

「え? 落とす?」

『はい、落とします』

神様がそつこいつと俺の下の地面に穴が開いた

「そつこいつとかあ————!...」

案の定俺は暗闇に落下した

神様（後書き）

次回は早めに更新します。

主人公設定（前書き）

今回は主人公設定です。

主人公設定

名前 神杉来斗

見た目 h a c k のハセヲ似

年齢 17 歳

好きなもの プラモ、本、甘いもの

嫌いなもの 他人を見下す人間、コーヒー

使用機体 ヴァリアス

主人公説明

他人を見下す人間が嫌いで基本的にそれ以外の人には優しい。
神に転生させられた後、篠ノ之束の隠れ家の近くに落下、突然現れたのと

束の作つていないコアを持つたISを持つていていうことで気に
入られる。

その後束の頼みでIS学園に行くことになる

機体説明

ヴァリアス

来斗の記憶にある、ガンダムに出てきた機体がベースで出来る
その場の状況によって好きな機体を選べる
しかし、強力すぎる武器にはリミッターがかけられ、機体にも
リミッターをかけている。

篠ノ之 束（前書き）

全然束のキャラがわからない。
かなり束のキャラが違うかもせんがご了承ください。

暗闇の中で一人の女性がキー・ボードを動かしていた

『ん、なんだろ、この反応は、このマニアにしては少し違うな、しかも突然現れたし。』

女性はウサミミをつけっていて、田の下にはクマが出来ていた。

『すぐ近くだし、少しだけみてみようか。』

女性はそうこうと暗闇から出て行った

来斗は今氣絶している、神に落とされた後、比較的低い所から出できたのだが、打ち所が悪く、氣絶してしまったのだ

『おーーー、あみ、起きなよ。』

『へ、ひつと~あなた誰？』

『いつも時はいつもから乗るものだと黙つた。』

「ああ、すこません、俺は神杉来斗です。」

『じゃあ、らいくんだね、私は天才の篠ノ之束なんだよー。』

(「らいくんってなんだよ、ていつかいきなり束さん」に遭いつてびう
よ。)

束「そういえば、らいくんのそれ、IIS?」

束の視線の先は俺の人差し指の指輪

「たぶんそうだと思します。」

束「たぶんつて血つのも氣になるけど、もしかしてらいくん動かせ
るの?」

「はい、操縦はよくわかりませんが。」

束「誰が作ったの?」

(ああ、どうしよう、神が創りましたなんていえないし。)

『来斗さん、来斗さん。』

(あれ? 神様?)

『はい、いまあなたの状況を見ていましたが、今の貴方の体は全て
がオーバースペックですが
それは知能の良さも例外じゃありません、今の貴方は篠ノ之束と同じくらい良いので
IISくらいなら作れるので、自分で作ったと言つてください。』

(ああ、わかつた。)

「自分で作りました、前にちょっと実物を見たら意外に作れそうだったから作りました。」

束「ええ～！？ほんとに？らーくんもすごい天才だねえ。」

「 そうでもないですか、所で、じばいへの間泊めてくれませんか？家
が無くて。」

束「だったらEIS学園に行つたら? あそこなら男性のEIS操縦者だつて言えば入れるよ

それまでの間はここにいて良いけど。」

「じゃあ、そこに行つて見ます。後少しコイツを弄りたいんですけど。

人差し指のヴァリアスを指差す

束「じゃあ、この束さんの研究所を使うと良いよ。天才の研究所だからね、ほとんどの物が作れるよ。」

「ありがとうございます。じゃあまたお願いします。」

東京へ研究旅行に行こうか。

「あれ、でも見当たらないですよ？」

束「」の束さんが普通の所に作るわけないじゃないか。ポチッとな」

束がスイッチを押すと地面がスライドして階段が現れた

束「じゃあいこつか。」

「はい。」

そういうえば機体は何を使おうか。

原作開始まで一ヶ月程度あるじじつくつ考えるか。

篠ノ之 束(後書き)

ほんとにセシリ亞戦辺りどの機体を使いましょうか。

福音辺りの機体は考え付くんですがね。

HS学園（前書き）

遅くなつてすいません、バカテスのほうも明日、明後日には投稿します。

俺はあの後研究所でヴァリアスを調べてみたけど

本当にガンダムに出てくる機体になれる様になっていた

後はほかの機体の武装も使える様になっていた位かな

それと操縦の練習もしてみたら、何故かすぐ理解できてかなり上達した。

たぶん、神様が気を利かせてくれたんだろう、

後サポート用にハロを作つてみたら、束さんが気に入つて欲しいといつので

ミニサイズのハロを作つてあげた。

そのお礼と書いて、バイクを作つて貰つた

そしてすぐに二ヶ月が過ぎ学園に行く日が來た

「それじゃあ、ありがとうございました。」

束「うん、何か用があつたら電話してね。」

うん、やっぱり原作みたいに興味を持った人には優しいみたいだ。

俺は束さん特製のバイクを使い I.S 学園に向かつた

I.S 学園

そして俺は I.S 学園に着いた

聞いた話だと迎えの教師がいるらしいけど。

? 「すまない、少し遅れてしまった。」

「いえ、今来たばかりです。」

千「そうか、私がお前のいくクラスの担任の織斑千冬だ。」

おお、やっぱりすごいオーラがてる

「神杉来斗です。」

千「すぐに入学式が始まる、移動するぞ。」

「はい。」

暇な入学式は寝て過いり、今は自己紹介のじかんだ

山「それじゃあ、出席番号順に自己紹介をしてください。」

この人が山田先生か、やつぱり小動物系だな、背は小さいのに

胸だけはでかい

そして順番に自己紹介している中、寝ている奴が一人、

あれが一夏か、山田先生が起こしてゐるのに中々起きない。

おっ立ち上がった、

一「えー・・・、織斑一夏です。よろしくお願ひします。」

えつと・・・、終わりじゃないよな。

一「以上です。」

おーおい、マジかよ、何人かずつこけてたぞ

すると千冬さんが教室に入ってきて、一夏の頭を出席簿で殴つた。

『スパン

あれ出席簿の音じゃねえぞ、下手したら死ぬ

一「げえつ、関羽！？」

いやいや、もう人間ですらない、サーヴァントじゃねえの？
だとしたらセイバーかな。

『ガツ』

「危ないじゃないですか。」

千「チツ、余計な事を考へるからだ。」

今の音は出席簿をナイフで防いだ音だ

て「いか今舌打ちしたよな！？」

それには何で分かつたんだ？

山「織斑先生、会議は終わつたんですか？」

千「ああ、クラスの挨拶を押し付けて悪かつたな。」

山「いえ、副担任ですしこれ位しませんと。」

どうやら織斑先生が自己紹介をするみたいだ、

千「諸君、私の役目は君たち新人を一年で使い物になるまで育てる
事だ。」

私の言つことはしつかり聞き、理解しろ。逆らつてもいいが、言つ
事は聞け、いいな

ん？なんか嫌な予感

その瞬間

『キヤ――――――!』

黄色い声援が響いた。

う、うるさい、
くや、忘れてた

まだ何か行つてやがる。

千「以上でSHRは終わりだ、諸君には半月で基礎知識を覚えて貰う。

その後基本動作を半月で覚える。いいか、いいなら返事をしろ、良くなくとも返事をしろ、いいな!」

『は、はい!』

ふつ、やつと終わつた、

一夏と話で見るかと思い、一夏の席に向かおつとしたら、ポーネルの少女

篠ノ之箒につれていかれてしまった

はあ、しょうがない次の時間にするか

そして一時間

—「ほとんど全部分かつません」

一 夏がぼけていた、だつておかしいだろ、
何で電話帳と間違えるんだよ。

とそんな事がありながら一時間田が終わった。

そして一夏が話しかけてきた

—「うう、俺は織斑一夏、同じ男同士仲良くなつぜ。」

「ああ、俺は神杉来斗、来斗って呼んでくれ。」

—「ああ、宜しくな、来斗。」

? 「ちよつとよひかして?」

—「ん?」

「ああ?」

? 「まあ、なんですか、そのお返事。このわたくしに話しかけられ
るだけでも光栄なのですから

それ相応の態度といつものがあるではないかしり?」

「・・・・・」

うん、いつこのまま相変わらず古手だ、一夏も同じなようだ

—「悪いな、俺君が誰か知らないし。」

セ「私を知らない？イギリス代表候補生にして入試主席のセシリ亞・オルコットを？」

一「質問いいか？」

セ「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

一「代表候補生ってなに？」

『『『がたたつ』』』

おいおい、また何人かずつこけたぞ。

「おい、マジで知らないのか？」

一「おう、知らん。」

セ「信じられませんわ、極東の島国と言つのは、こつまで未開の地なのがしら。常識ですわよ。」

「一夏、代表候補生つて言つのは國家代表IMO操縦者の候補生つてことだ。」

一「確かにそんな感じの名前だな。」

セ「そう、ヒリートなのですわー。」

セ「本来ならわたくしのような人間とクラスを同じくするだけでも

幸運なのよ。おわかり?」

「「そうか。それはラッキーだ。」」

セ「・・・バカにしてますの?」

セ「大体、貴方たちHSについて何も知らないくせに、よくHSの学園に入れましたわね。」

一「俺に何か機体されても困るんだが。」

「お前の方がバカだろ、俺よりHSに詳しいのなんて束さんくらいだぜ。」

セ「なにを言つてますの、そんな訳ありませんわ。」

「まあ、信じるも信じないもお前しだいだ。」

キーンゴーンカーンゴーン

セ「また後できますわ、逃げないとねーよくつてー?」

また来るのかよ、めんどくさい

千「さて、この時間はまず再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。」

うわ、めんどくさいな。

『はいはい、織斑君を推薦します。』

—「え？、おれ！？」

ダンマイ一夏

『じゃあ、私は来斗君を推薦します。』

千「では候補者は織斑と神杉でいいか？」「

—「ちよ、ちよっと待った俺はそんなんのやら……」

千「自薦他薦は問わない。」

—「い、いやでも。」

あきらめろ、決定事項だ

セ「待つてください！納得がいきませんわ！」

きたよ、つむいのが

セ「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥をさらしですわ！」

わたくしに、このセシリ亞・オルゴットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

マジでつむい！

セ「実力でいけばわたくしが代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で

極東の猿にされてはしまつます！」

俺が猿ならあんたは何だよ？
あんまり調子に乗るなよカス

セ「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと
自体、
わたくしにどうては耐え難い苦痛で……」

ブチつ

「いい加減にしろよ、カスが！黙つて聞いてりやいい気になりやが
つて！」

大体その後進的な国で開発された工芸の代表候補生になつたからつ
て、
威張つてたのはどこのカスだ！」

一「イギリスだつて大してお国無いだろ。世界一まよい料理で
何年覇者だよ。」

セ「なつ！？貴方たち、わたくしと祖国を侮辱しますの！？」

「あんたの態度を見ると格下には侮辱してもいいって言つてるよ
うなもんだぜ？」

セ「わたくしがあなたより立つてると申しますの！？」

「ああ、そうだね。俺より優れていると言つたいなら工芸の「アベ
ライ作れるようになれよ。」

『無理だよ、神杉君、EISのコアは篠ノ之束博士意外に作れないんだから。』

「俺は作れるぜ、しかも篠ノ之束のお墨付きだ。』

セ「つ！決闘ですわ！」

「別にいいぜハンデはどのくらいつける？」

セ「あら、早速お願いかしい。』

「いや、俺がハンデをつけたんだよ。』

そういうと、クラスで爆笑が巻き起こった

『本気で言つてるの？神杉君？』

『男が女より強かったのって大昔の話だよ？』

「でもそれはEISが使えたからだろ。俺らはEIS使えるから！」
にいるんだぜ？」

『でも相手は代表候補生だよ？』

『代表候補生は一部を除き、その国人しかなければならないから、国のレベルが低ければ代表候補生だつて弱い。』

「大体俺は篠ノ之束に並ぶ天才だぜ？そんなカスに負ける訳が無い。』

『

千「さて、話はまとまつたな。それでは一週間後の月曜に勝負を行
う。

織斑と神杉とオルコットは用意をしておけ。」

さあて、どうあそんでやるか

その後、とある教室

? 「過去の経験が不明、ノーナンバーのコアの機体を使つ男ねえ。
さらにコアを作れるとは。
しかもいきなり代表候補生に勝負を挑むなんて。
ふふ、面白い人ね。」

とりあえずセシリア戦の機体は決まりました。
何なのかは次回あたりに。

同居人？（前書き）

すみません、結構読みづらいかもしません

同居人？

放課後、俺は一夏とともに机にうなづいていた

「痛い、胃が痛い。」

一夏は違うことどうなづけているようだが、俺はあの金髪ドリルの
ストレスで

胃がとても痛くなっていた

しかも、今は他のクラスからも女子が来て（俺達意外女子だが）
小声でこそこそ話している

俺はこういうのが嫌いだ、聞いているとイライラするのだ、
それによりさらによく胃が痛くなりかなりやばい。

山「ああ、二人ともまだ教室にいたんですね、良かった。」

「なんすか？」

俺が顔を上げると同時に一夏も顔を上げた

山「えつと、お二人の部屋が決まりました。」

一「あれ、俺らの部屋つて決まってないんじやなかつたんですか？
聞いた話だと一週間は自宅から通学だつて。」

俺はホテルだが。

山「そうなんですが、事情が事情なので無理やり部屋割りを変えた
そうです。」

一「まあ、分かりましたけど荷物はどうするんですか?」

あれ?ダースベイダーの曲が聞こえる

千「私が用意しておいた。」

「あれ?俺のプラモは?」

千「無理やりバッグに詰め込んだ、変な音がしたが大丈夫だろ?。」

「うう——。」

くそ、この人相手じゃ文句が言えない、
俺のガンプラが、

山「じゃあ、時間を見て部屋に行つてください。」

その後夕飯の時間や大浴場についてなどを聞き、今は部屋に向かっている

そして

「・・・いつまで着いてくるんですか?」

部屋の前でストーカーさんに話しかける

？「あら、気付かれちゃった。」

「何の用ですか？生徒会長さん。」

？「・・・なんで知つてるのかしら。」

「まあ、いろいろあつて貴女の情報を見たんですよ、更織楯無さん。まあ、詳しくは分かりませんでしたけど。」

半分嘘だ、この人の事は前から知つていた、原作でも出てたしね、でも本当に詳しいことが分からなくなつてている

楯「そう、よく考えるとあなたなりできそうね。」

「まあ、別に誰かに言つわけじゃありませんから安心してください。」

楯「そう、分かつたわ。」

「所でなんでストーキングなんてしたんですか。」

楯「少し興味があつたからね、男のエス操縦者で篠ノ之束と同じくらーいの天才

普通は気になるでしょう。」

「せつですか、じゃあ、部屋に入るんで。」

楯「ええ、それじゃ、またあとで。」

そして俺は部屋に入り、数分すると、誰かが入ってきた

あつと同室の人だらつ

楯「ハロー」

「何でいるんですか？更織さん。」

楯「だつてこ」私の部屋だもの。」

「『real』（本当ですか？）」

楯「何で英語？ええ、まあ本当よ、面白そうだから一緒に部屋にしちやつた。」

「そんな、てへ、みたいな感じで言われても」

楯「まあ、いいじゃない、それにお願いもあるし。」

「却下です」

楯「何にも言つてないじゃない。」

「絶対面倒な」とですから。」

楯「残念ながら拒否権はないわ、内容だけどあなたは生徒会副会長になつてもうつわ。」

「はあ、仕方が無いですね、まあ、いいですけど。」

楯「ありがとー」

突然楯無さんが抱きついてきた

「ちょっと、あんまり抱きつかないでください」

楯「別にいいじゃない、減るものじゃないし。」

「俺じゃなかつたら、襲つてるかも知れませんよ。」

楯「あら、別にいいのよ襲つても。」

「やめてください、本気にならびつかるんですか。」

楯「うーん、責任を取つてもらおうかな

「はあ、ほんとに疲れる。」

ため息をつきながら様子を見る。

楯「はー」

うん、すごいかわいい、じゃなくてなんて人たらしなんだろう

「もう疲れたんで寝ます。」

楯「じゃあ、そっちのベッドを使つてね

「はー」

そして俺は眠りについた

同居人？（後書き）

この続おじつじょつ

クラス代表決定戦 その1（前書き）

今回はセシリア戦のパート1です。

クラス代表決定戦 その1

朝、俺はいつもと同じくらいの時間に起きたしかし、違和感がある、何故か動けないのだ、何事かと布団を捲ると、静かに寝息を立てている楯無さんが抱きついていた

「あれ、なんで居るんだ？」

楯「うん、おはよ。」

楯無さんも起きたようだ

「ちよつと楯無さん、なんで居るんですか。」

楯「だつて、ここ私のベッドだもの。」

「俺言われた場所に寝ましたよね？」

楯「ええ、でもあなたのベッドとは言つてないわ。」

「じゃあ、あっちに寝ます、ってあれー？」

楯「ここは昨日はあつたはずのベッドが無くなっていた
楯「会長権限で撤去しちゃった。」

「マジですか？」

「ええ、本気と書いてマジと読むわ。」

「たまー」

昨日一日過ごしただけで分かつた事がある、この人に逆らうだけ無駄だと言う事だ

「そんな事より朝食を食べに行きましょー!」

「別に良いんですけど、早く着替えてくださいよ。」

今の樋無の服装はYシャツに下着、はつきり言って田のやり場に困る

「氣になるの？」

そういうつて、俺の腕にしがみ付いて来る、腕に柔らかい感触が、

「ちよ、くつついてますつて。」

「ふふふ、えつちいなあ。」

「樋無さんがやつたんでしきうが」

橋「まあまあ、時間なくなるわよ?」

「はいはい、じゃあ入つて来ないで下さいよ。」

そういうて洗面所に入り着替え始める

そして着替え終えるて洗面所から出ると既に着替えた樋無さんが居た

樋「じゃあ、こましおつか、おねーさんお腹すいちゃったわ。」

「はいはー」

食堂

いま俺は朝食を食べている、普段なら簡単なことなのに
俺は今今まで一番手間取っている。

その理由がやはり

樋「はい、あーん」

樋無さんだ

なぜかさつきからずつと食べさせようとしてくる
昨日この人に逆らつたら一時間以上くすぐられた、
本当にあればやばかった、腹筋が破壊される所だった

そつなると

「あ、あーん」

食べないと駄目なんだよね

そしてこれが毎日になり
あつという間にクラス代表決定戦当番となつた
しかしまだ一夏の機体が届かない

一夏対ドリルの勝者と戦つから、俺もひまなんだよね。

それになんか一夏と篠の間で妙な空気が流れている

一「なあ、篠」

篠「何だ、一夏」

・・・空気が重い

一「気のせいかもしけないが」

篠「そうか。気のせいだろ?」

一「HOTO」と教えてくれる話はどうなつたんだ?」

ああ、そういうことが。

篠「・・・・・・」

もしかして

一「田をそらすなつ」

そういうえば一夏の奴毎日剣道場に行つてたな

――――――――――

竇「・・・・・・・・

うひ、耐え切れない

山「お、織斑くん織斑くん織斑くんつ――」

ナイス、山田先生

――「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

山「は、はい。す、は、す、は、

――「はい、そこで止めて」

山「うひ

おいおい、本氣で止めてるぞ、『冗談通じないよな、この人

――・・・・・

山「・・・ふはあつ――ま、まだですかあ?」

たぶんやめさせるタイミングを見失つただけだと思います

千「田上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パンツ!

相変わらずすす」と音だ

—「千冬姉」

ああ、バカだな、そんな事言つたら

パンツ！

もう一発来るに決まつてゐだろ

千「織斑先生と呼べ。学習しろ。そもそもくば死ね。」

そりやあ教師の台詞じやないですよ

山「そ、そ、それでですね！きました！織斑くんのTIS」

やつときたか、待ちくたびれたぜ

それなのに

あれだけ待たせたのに

----- 勝者、セシリ亞・オルコット

何で負けてんだよ、このバカ野郎！

まあいい、次は俺の番だ！

クラス代表決定戦 その1（後書き）

ぜひ感想お願いします

クラス代表決定戦 その2（前書き）

今回でクラス代表決定戦は終了です。

クラス代表決定戦 その2

「ヴァリアス、タイプセレクト『テスサイズヘルカスタム』
そつまうと体に『テスサイズヘルカスタム』の装甲が展開される

「さあ、わがままお姫様にお仕置きをしようか」

そしてペリトからアーリーナに降りる

「わあ、はじめようぜ」

セ「・・・・・」

あれ？返事が無い

「おい、ドリル頭」

セ「はつー？すこせん、少し考え方をしてました」

ああ、そつこえは一夏にフラグが立つんだっけ
別にドリルは好きじゃないから別にいいけど

「わいわと始めようぜ」

セ「わかつました、始めましょつ

そしてブザーが鳴った

「こへこへ」

まず俺は鎌を振り、斬撃を飛ばす

セ「その程度の攻撃！」

セシリアはその攻撃をかわす、しかしその先にはすでに俺がいた

「はあっ！」

そして斬撃を当てる

セ「くつーーまだですわーー！」

セシリアは距離をとり、ビットを飛ばしてくる

「そんな攻撃に当たるわけ無いだ！」

俺はビットをかわしながら壊していく

「ぱうみはらせみひみ」

全てのビットを壊すと俺はハイパージャマーを使

確かあれにはミサイルが隠されていたはず
姿が見えなければ当てられないからな

「ヤビト元気でしたのーー！」

見ておもしろい

「いやだよ

俺はセシリアがこっちを向くと同時に鎌を振り下ろした
ビームの一撃でシールドエネルギーが切きたよつだ

『試合終了、勝者、神杉来斗』

パンッ！

試合を終えてピットに戻ると織斑先生の出席簿が待っていた

「いっただー！」

千「遊びすぎだばか者、束からの情報だと開始数秒で終わるはずだ」

確かにストライクフリーダムとかクアンタを使えばいけるかも知れない

「でもそれならそれで怒るでしょ？」

千「まあ、そうだな。ほじほじこじらと言つ事だ」

「了解です」

千「では、今日ほじらつ休め

クラス代表決定戦 その2（後書き）

戦闘描写がすこく難しいです

ちなみにヒロインは櫻無とシャルの予定です

すこません、F-100零式ばかりやつてました
テストも近いのに・・・

セシリア戦後 部屋にて

セシリアと戦つた後、俺は部屋に戻っていた

「はあ、今日はなんか疲れたな

いつもまだ慣れてないからな、しょうがないのかも知れない

そう考へて、いのちに部屋に着いた

「早く寝よ。」

ガチャ

楯「お帰りなれど、『』飯にする？お風呂にする？それとも、わ・た・し？」

バンッ！

幻覚だな、うん、きっとそういうだ

いくら同じ部屋だからって、楯無さんが裸エプロンで居るわけがない

でもなんどよりもよつて裸エプロン

そんな特殊な性癖があつたのか、俺は
いや、そんな訳がない、たまたまだ、たまたま

では気を取り直して

ガチャ

楯「お帰りなさい、私にする？私にする？それともわ・た・し？」

もう現実逃避はやめよつ、これは正真正銘本物の楯無さんだ
楯無さん、止めさせないと毎日この格好で待つてそつだからな、
でも言葉で言つても聞きたくはないしな、

だったら、

「それじゃあ、楯無さんを貰こましう

そつ言つて俺は楯無さんをベッドに押し倒す

「楯無さんが誘つてきたんですからね」

耳に息を吹きかける

楯「ふああ、あ、あれは『冗談で』

ふふ、かわいいな

「楯無さんは俺じゃ嫌？」

楯「そ、それは、その・・・」

楯無さんみたいな人つてからかわれるのに大抵慣れてないんだよね
でもかわいそうになつてきたな

「ははは、楯無さんつてからかわれるのに慣れてないんですね」

楯「えへ~じうこ~」とへ。

「ふふ、わ~あまでの話は冗談ですよ」

楯「も、もう一おねえさんをからかっちゃダメよ」

「でも、次あんな格好したら本当に食べちゃいますよ」

「これでわ~と、もうやらな~はず

楯「そのときは、責任を取つてもいいわ。」

あれ?

「え~と、じうこ~ですか?」

楯「一生を共にしてまわ~」

酷くな~るよね~?」

「それつて要するにけ、」

楯「はいはーい、夕飯たべにこ~ましょ~」

む~、遮られてしまった

でも顔が赤かったし、まんざらでもないのかな?

でも、楯無さんも一夏ラバーズに入つてなかつたつけ、

この口から句故か夜に櫛無さんと寝るといきあじきして寝れなくなつた
まあ、もともと俺が面の時点で原作ブレイクしあがつてますナビ

シャルロッテまで遠いなあー

楯無さんもキャラあつてるかわからんし
書いてみるとかなり難しいですよね

それと、ぜひ感想お願いします

代表決定！（前書き）

すいません、テストが近く、勉強の合間に書く感じなので
11月24位までの間、投稿が遅くなります

代表決定！

翌日、朝のH.R

山「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

はは、一夏の奴めつちや暗い顔してやがる

一「先生、質問です」

山「はい、織斑くん」

一「俺は昨日の試合に負けたのに、なんでクラス代表になってるんですけど？」

山「それは……」

セ「それはわたくしが辞退したからですわ」

一夏に惚れてから態度は変わったけど
いちいち腰に手を当てるポーズやら上から田線な言葉、変わらないな

？「君はなぜ辞退したんだ？」

耳ではなく、頭から聞こえる声

「まあ、一夏には強くなつてももうわないと黙だからな

？」「やうこつ事にしておひ

ひ、ロイシには面倒だからやめたって事が気付かれてやがる

あ、ちなみにロイシのことを説明するには数時間前にやかのぼらな
くちやいけない

数時間前

「ふああ、ふう

いつもの時間に起きると樋無さんが隣に居た、
ただひとつ違うのは前まであつたソシャツが無くなり、
下着だけで寝ている

まあ、こうこのにはもう慣れたけどね

しかし、それ以外にも違つところがあった、
腕時計が腕に付いていた

（あれ？おれ時計なんて持つてなかつたよな？）

すると、頭の中に声が響いてきた

神『おひさしごりです、来斗さん』

『あんたあの時の神か?』

神『ええ、そうです、今日は用件があつてきました』

『なんだ?用件って?』

神『実は以前に渡し忘れたものがあつたので』

『あの腕時計のことか?』

神『はい、あれにはA-Eが入つてます、ちなみに投影も出来ますよ』

『なんだよその近未来的な腕時計!?』

神『ちなみにA-Eは自分で選べますよ』

『種類は?』

神『えっと、ティエリアとかフェルトとかキラとかアスランとかですね』

『声つて外の聞こえるのか?』

神『それは大丈夫です、声は今みたいに頭に響く感じなんで、まあ、外部音声も使えますけど』

『じゃあ、用件は終わりか?』

神『後ひとつだけ、あなたがこの世界に来たことでイレギュラーな存在が出現したようでそれを壊して欲しいんです』

『田舎とかは?』

神『あなたと同じMSです』

『MSだな、分かつた』

神『くれぐれも気をつけてください』

『ああ、分かつてるとよ』

神『それでは』

つて事があつたのだ

前まであつたハロは櫛無さんにあげた、水色の小型のボディーにして何でも仕事の手伝いに使うそうだ
まあ、情報処理能力が高いからね

それじゃあ、戻つて

一「じゃあ、来斗でいいじゃないですか」

見苦しいな、一夏

「俺も辞退した」

—「何でだよー?」

「お前なあ、よく考えろ、お前は狙われてるのに今の弱いままだったら何があるかわからんにだろ?」

—「まあ、それはそうだな。そこまで考えてるとは、見直したぞ」

「まあ、実際は面倒だつたからだなぞ」

—「ひょっと見直した俺が馬鹿だつたよ」

ふつ、やつぱつこいつこいつのは楽しご、悪趣味? そんなことなあつませんか

「わつだよーお前は馬鹿だー」

—「わざわざおまえで話つひと無つだろ」

「否定できるのか?」

—「わつ、されば

千「おい、いい加減に話を進めるぞ、そして織斑が馬鹿なのは昔からだ」

ダースベーダー登場

—「ナ冬姉まで…?」

やつぱ馬鹿だ、禁句言こやがつた

バシンッ！

千「織斑先生だ」

—「すいませんでした」

ものす』に勢いで椅子の上で上座をする一夏

千「クラス代表は織斑一夏、異存は無いな？」

はーいと全員（一夏除く）が返事、

俺は返事をしながら、せめてかまつてあげよつよど、一夏を見ると、まだ上座をしている

ティ『君のせいな気がするんだが』

聞こえない、聞こえないよ、ティエリアの声なんて

そんな感じで朝のHRは終わった

代表決定！（後書き）

友達にこの小説について聞いたたら、なんか足りないって言われたのですが、自分ではよく分からないので、アドバイスお願いします

お祝いパーティー（前書き）

遅くなつてすいません
もつすべテストが終わるので

お祝いパーティー

千「ではこれよりEISの基本的な飛行操縦を実践してもいい。織斑、神杉、オルゴット。試しに飛んで見せろ」

この人はほんと強引だな、と思いつながらもやらないと怒られるので展開することにした

「ヴァリアス タイプセレクト ウイングゼロカスタム」

そういうと一秒もしないうちに装甲が展開される
周囲からは『きれい』や『かっこいい』という声が聞こえる

まあ、ウイングゼロカスタムだからな、翼がすばらしい綺麗なんだよね

千「おい織斑、早く展開しろ。神杉を見習え、
熟練したEIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

一夏のやつ、まだ展開してないのか。
まったく、遅いな

その後、一夏は無事に展開、しかし、上昇スピードが遅く、また怒
られていた

しかも下降の時、すごいスピードで俺に落下してきた
まったく、ティエリアが教えてくれなかつたらどうなつてたか

まあ、後は武装展開の時も遅いつて言われてたなー、
俺?もちろん大丈夫だつたよ?

一夏は授業終了後もグラウンドの穴埋めに時間を使つていた

・・・・・・・・・・

『とこづわけでつ！織斑くんクラス代表決定おめでとづー。』

はい、なぜこんな状況なのか、情報を整理しよう

部屋に戻る 時間を潰す クラスの女子が来る 食堂につれてこられる（今こじーーー）

情報整理完了！

まあ、面白そうだからいいかな？

『いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がりがねえ』

『ほんとほんと』

『ラッキーだったよねー。同じクラスになれて』

『ほんとほんと』

おいーそこのやつーお前は一組だろー！

ていうか、明らかに一クラス以上の人数居るだろー！

まあ、こんな状況の女子に何を言つても無駄だろー

俺もせいぜい楽しもう

そしてひとまず腹の減った俺は飯を食おうと思つたのだが

? 「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏くんと
神杉来斗くんに特別インタビューオーをしごきましたー！」

オー、と蹠が言ひ、なんでおー？

薰「あ、私は一年の薫子。よろしくね。新聞部の副部長やつてま
ーす。

ハイこれ名刺

何で名刺持つてんだよ
ていつか滅茶苦茶画数多いな、めんどくさいつだ

薰「ではまず織斑君ークラス代表になつた感想を、ビツボーー。

ああ、俺もあとから言わなきやいけないのか、めんどこ

ー「えーと・・・

まあ、なんといつか、がんばります」

薰「えー。もつといじコメントちよつだいよー。
俺に触るとヤケドするぜ、とかー」

うわッ！ふるッ！

ー「自分、不器用ですかー」

いつわふるッ！

薰「うわ、前時代的！」

貴女もです

薰「じゅあまあ、適當に點造しておくからこことして」

いやッ！駄目でしょ！

薰「じゃあ、来斗へんコメントお願ひ」

「ああはい、俺に近づいたり・・・たぐはりう

ばたつ！

あれ？何人が倒れちゃった、どうしたんだろう

薰「い、いいコメントをありがとつ

それじゃあ、専用機持ちの集合写真を撮らせてね」

先輩はさつと俺達を引っ張つていって、並ばせた

薰「それじゃあ取るよー。35×51-1-24は？」

「74、375です」

薰「じゃ答ー」

パシヤ

あ、あれ？何故か全員はいってる、なぜ？
あの一瞬に移動したのか！？

その後の部屋で

楯「いやー、来斗君凄い」と呟つたねえー

「何のことですか?」

楯「さつきのパーティの取材の時よ
俺に近づいたら食べかけまだっけ、じゃあ私も食べられちゃうの
ね」

およよ、て感じで崩れ落ちるふりをする楯無さん

「安心してください、嘘ですか?」

楯「あら、それは残念。それじゃあ早く寝ましょ?」

「はいはい、わかりましたよ」

べジドに入ると当たり前の様に楯無さんが抱きついてくる

楯「それじゃあ、お休み」

「おやすみ」

そして俺は眠りに付いた

お祝いパーティー（後書き）

つぎも宜しくお願ひします

転校生はセカンド幼なじみ（前書き）

懲りずにテスト週間に投稿です

まあ、一様やるにはやつましたが・・・

あ、あと、今書いてる『インフィニットストラストス零ゼロ』で
アンケートを取つてるのでこいつもお願いします

転校生はセカンド幼なじみ

翌朝

『織斑くんと神杉くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた?』

「「転校生?」」

朝、教室に入るなりクラスメイトに話しかけられた

まだ四月なのに転校か、
確かにIS学園は転入には厳しい条件があつたはずだよな

『そつ、なんでも中国の代表候補生なんだつて?』

「「ふーん」」

セ「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

イギリストの代表候補生登場

まったく腰に手を当てるのいい加減に止めて欲しいんだけどな

篇「このクラスに転校してくるわけではないのだろう? 騒ぐほどのことでもあるまい」

あれ? 篇? さつきまで窓際に居なかつたか?

「「どんなやつなんだろうな」

アンタの幼なじみです

第「気になるのか?」

「ん? ああ、少しば」

第「ふん・・・」

一 夏の奴多分違う」と考えてるな
まったく鈍感な奴だ

第「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか?
来月にはクラス対抗戦があるというのに」

セ「そりー。そりですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実
戦的な訓練をしましょ。」
ああ、相手なりこのセシリア・オルゴットが務めさせていただきま
すわ。

なにせ、専用機を持つているのはこのクラスでは、
わたくしと来斗さんと一夏さんだけなのですから

一 「まあ、やれるだけやってみるか」

セ「やれるだけでは困りますわー。一夏さんには勝つていただきませ
んとー!」

第「そりだぞ。男たるものそのよつな弱氣でじりつかぬ

『織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー』

まあ、無理だらうな、上手く飛翔する事も出来ないんだからな
セシリ亞の時ははしゃんと使ってやがつたくせに

つて気付いたら周囲が女子だらけだ

『織斑くんがんばつてねー』

『フリー・パスのためにもねー!』

『今の所専用機を持つてるクラス代表つて一組と四組だけだから、
余裕だよ』

一夏も氣の毒に、と考えていると不意に別の声が聞こえた

? 「 - - - その情報、古こよ

見てみると、腕を組み、片膝を立ててドアにもたれている・・・え
ーと

ー 「鈴・・・?お前、鈴か?」

そうそう、鈴だ。

りんと聞こえてコイツ、じやなくて鏡音リンを想像した俺は悪くないはず

鈴「そりや。中国代表候補生、凰鈴音。

今日は宣戦布告に来たつてわけ」

ふつと小さく笑う

ー 「何格好付けてるんだ?」

鈴「んなつ・・・?なんてことないのよアンタはー。」

なんだ、演技だったのか。

ちよつと「トイ・ラ・ラ」と忘れかけてたから分からなかつた

ティ「そつこえば、原作の知識を幾らか消してるうじいぞ」

久しぶりに登場、ティニア！

『そつこのは先に言おひぜ』

ティ「すまない、忘れていた」

『おじおじ、頼むぜ』

ティ「次からは気をつける」

はいー今回の出番終了ーー

千「お前も早く席に戻れ」

あれ、わへよ！？（なぜ！？）何であいつら居ないの？
話してる間に戻ったのかよ！？

そして今日もヒルの訓練と授業が始まる

転校生はセカンド幼なじみ（後書き）

実は私、学校でお前オタクじゃない?とか言われてます
まあ、あんまり気にしてないですが
そんなにボカ口って悪いですかね?

自分の気持ち（前書き）

はい、テスト勉強で徹夜してゐる合間に投稿です

自分の気持ち

その日の放課後、一夏の特訓を手伝ったあと、シャワーを浴びたり、夕食を食べたり

して、現在時刻八時過ぎ
くつろぐムードの俺はお茶を飲みながら本を読んでいた、
すると樋無さんが話しかけてきた

「ねえ、最近冷たくない？」

「そうですかね？」

毎日一緒に寝てるナビ

「最近あんまりヤラないじゃない？」

は？

「なにをですか？」

なにかしてたかな？

「ん~と、いつもとかな

そういうと樋無さんは俺を床に押し倒す

「あー、この間してくれたじゃないよー。」

「あー、この間してくれたじゃないよー。」

まさかあれか

「あれはからかってやつたんですよーー?」

「そんな、あそこまでやつたのに、やつぱり私との関係は遊びだったのね?」

「いやいや、そんな関係じゃないですよし」

「じゃあ、即成事実を作りましょうか」

え? [冗談だろ?] [冗談ですよね?]

「やめ! 止めてくださいーー! 」

「のじや本当にやりかねない

「ふふ、それじゃあ」

顔を近づけてくる樋無さん

え? 近い近い、俺の顔との間残り十センチ!

「止めてくださいーーマジドー! 」

「ふふ、じゃあ」

「かああんーー! 」

突如隣の一夏の部屋から爆音が

そしてその振動で机の上の本が何か言いかけた樋無のベッドに落下

「痛つ！んむ！？」

「んむ！？んん！？」

田の前には樋無さんのドアップの顔そして
・・・唇に柔らかに感触
え？ええ！？

「ふはー！な、なにするんですかー！樋無さんー。？」

「え？ああ、ええ」

やばい、フリーズしてゐ

「樋無さんおきてー起きなことまたキスしますよ？」

「ええ、喜んでー」

あ、田覚めた

「じゃあもう一回しましょい」

「今の冗談です」

「ええ～、そんな～」

てか軽いな！

「き」しないんですか？キスしたの

「ええ、初めてが貴方なら」

はい？

「冗談ですよね？」

「さあ、どうかしら？」

やばい、はめられた！

「ちよっち一夏殺つてきまーす」

「やりすぎないようにな」

「さあ？わからんな？」

・・・・・・・・・・・・

楣無視点

う、キスしちゃった

事故とはいえファーストキスだったのに・・・
でも初めてが彼で良かつた、

ふふ、もうこれは惚れちゃったかな？
でも次はもっとといいムードでやりたいかな

・・・・・・・・・・・・・・

もどりて来斗視点

俺はいま一夏の部屋の前に居る、音が聞こえないし
寝てるのかな、かな？

やばい、なんか変なスイッチはいった
まあ、いいや
とりあえず・・・

「死にそらせ！織斑一夏あ～！～」

案の定部屋には一夏だけ、かと思ひきや簫が居た
でもそんなのかんけいねえ！

「ファーストキスの責任を取りやがれ！」

あれ？なんか言い方間違つた？

「は？なんの事だ？俺にそつちの趣味は無いぞ！」

「お前のせいで俺は初めてのキスをうばわれたんだ！」

「なーーまさか！一夏あー！」

簫、参戦

「ちが、簫、ごか」

メキツー！「キツー！

「頼む、やめ」

「「聞く耳もたん！」」

バキツー！「シヤー！

「ああ！駄目！その間接はそつちほんぢは…」

メキヤツー！「キツー！

「「まあ、こんなものだろ？」「

「・・・・・・・・・・・・・・

後に残つたのは動かなくなつた一夏の屍のみ、一件落着！

さあ、部屋に戻ろう

・・・・・・・・・・・・・・

場所は戻つて自室

「ねえ、来斗くん

「なんですか？」

「その敬語止めてくれない？」

「なぜですか？」

「なんでもー。」

そういって覆いかぶさつてくる樋無さん

「言わない」とまたキスするわよ

「わかったー！樋無ー。」

キスに比べたらお[女]い御用だ

「ふう、そんなに私とのキスは嫌？」

やばいです。

涙目上目づかいの樋無

「いや、嫌じゃないけど

「じゃあ、良いじゃない」

ええ？ダメでしょ

「駄目だろ、付き合つても無いんだから」

「私の事嫌い？」

「ああ？どうだう？」

「ぶつ、いじわるう

頬を膨らませた楯無もかわ、ゲフシングフン

「早く寝ないと一緒に寝ないよ?」

「わかった!」

そうじつて布団に入つて抱きついてくる

「……私はこんなに好きなのに

「……俺は……好きなのか?」

「……一人のつぶやきは相手には聞こえなかつた

自分の気持ち（後書き）

はあ、テスト勉強めんどいなあ。
あ、「IS 零式」のアンケートも宜しくお願ひします

クラス対抗戦（前書き）

またまた懲りずに投稿

あはは、終わったね、いろんな意味で

零式はアンケート結果が出ないと書けないので
ベースは作っておきましたけど

クラス対抗戦

後日話しを聞いた所、あの謎の振動は一夏が鈴を怒らせた際に
ISの部分展開で壁を殴ったせいらしい

・・・後日再び一夏をボコつた

あの後、樋無さんが妙に積極的になつたんだよね
まあ、前から積極的だつたけどさ

• • • • • • • • • • • • • • • •

んでもつて試合当日

第一アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と鈴
もうすでに鈴と一夏はアリーナにスタンバイ中
でもさ、何で甲龍つて書いてションロンつて読むんだろ
ションロンつてあれだよね、星入りの玉七つ集めると出でくる龍
おっと、試合が始まる

開始早々一夏は押されていた、あの馬鹿でかい青竜刀を避けるのに苦労してやがる

そして俺は内心

(やれー! もつとやれー! 殺してしまええー!)

と、そんな時、一夏が吹っ飛ばされた

うん、皆の敵だよ、おれ

ドガアーン！！

そんな思考のなか、アリーナに異物が落ちてきたのだが
『おい、来斗。二十キロ先の海上にイレギュラー反応だ』

『あの神が言つてた奴か、タイプは?』

『タイプは・・・な!?サイコガンダムにテストロイガンドムだと
!?』

『は!?相当やばいだろ! わざと行くぞ!』

俺はアリーナの方を一夏達に任せ、気付かれないようにアリーナの
外に出ようとするが
ハッキングでシェルターが降りていて出られない

「ちつ! めんどいがやるしかない」

俺はIISを呼びだす

「ヴァリアス、タイプセレクト、ストライクフリーダム!」

俺はIISを開くと、シェルターをビームサーベルで切り裂く

『時間が無い、急!』

「ああ!」

俺は最高スピードでターゲットに向かった

・・・・・・・・・・・・

千冬サイド

「織斑先生！――十キロ先の海上にアンノウン反応です！」

試合中に謎の機体が現れたと想つたら、山田先生が言つ

「それは本当か？」

「はい、なつ！？アンノウンに向かう反応これは
・・・神杉君です、神杉君がアンノウンと接触しました！」

「通信は取れるか？」

「やつてみます。」

・・・・・・・・・・

来斗サイド

『来斗、通信だ！』

「なんだよこのくそ忙しい時にーつなげるー！」

たつた今、目標に接触した時にティエリアに言われた

『分かつた』

『おこー！神杉！向をしていろー。』

千冬さんの怒鳴り声

「何つて、ここつらと遊んでるんですよ

『お前、そこつらが来るのを知っていたのかー？』

「こえ、つこわ来たばかりですか

『まつてこり今教師を援軍に送るー。』

「こえ、止めてください。はつせつと黙つて邪魔ですー。』

こんな歩く要塞と教師じや一一分と持たない

『何を言つて

「すみません、切れますー。』

まだ相手には気付かれてないな

「おー！ティエリア、ドラグーンの操作は任せるー。』

『解

「さあ、行くぜ。いつから先は瞬き禁止だー。』

まず、陽電子リフレクターがあり、時間のかかる

『デストロイは後回しでサイドから倒す』とする

「行けー・ドラグーン！」

まずドラグーンを『デストロイ』に飛ばし、『デストロイ』の注意を引いておいて貰う

そして、ウォーチュール・リュミールシステムを発動、光の翼が放出される

そして超高速で接近し、ビームサーベルで右の指のビーム砲を切り落とす

その勢いのまま、左側に回り、同様に指を切り落とす

全身がGによって軋むが無視し、ハイマットフルバーストをうち、沈める

「ティエリア、そつちはどうだ？」

『まだ一機も落されてはいないが、エネルギーがもう切れる』

「じゃあ、こっち終わつたから一回戻れ

『了解』

そういうと、翼にドラグーンが戻っていく

「コイツにはビームサーベルしか効かないからな。ヴァリアス、タイプセレクト、ガンダムエピオン！』

ビームサーベルだった『コイツ』だよな

「セツセと元の居場所に引き返しゃがれ！」

俺はゲームサーベルを空に掲げ、巨大になつたそれを持つたまま一回転する

そしてその後には、真つ一になつたテストロイが海に沈んでいった

「・・・切捨て御免

『なに格好つけてるんだ』

「まあ、いいじゃん。こんな時くらい

『ふ、それもそうだな』

「さて、戻りますか

『帰つたら先生の説教だな』

はー忘れてた

『やついえば、無断で出てきたんだっけ。そういうえば一夏達は?』

あいつらに任せてきたからな

『原作と違つて再起動もなく、けが人も出なかつたそつだ

「そつか、そりやあ良かつた

原作だと一夏が怪我するからな

・・・俺が帰つたらボコれなくなる

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

千冬サイド

「海上のアンノウン反応消失、神杉くんが帰還します」

「やれやれ、あいつにも困ったものだ、しかしいつたい誰が？」

「織斑先生？」

「いや、なんでもない。神杉の方のアンノウンの回収を。
あと、神杉をレベル4エリアに呼んでください」

レベル4エリアとはその言葉どつり、
レベル4以上の権限を持った人物しかは入れないエリアだ

「了解しました」

・・・・・・・・・・・・

来斗サイド

「で、なんの用ですか？」

おれは今、織斑先生に呼ばれて、地下の良く分からぬ空間に居る
そこにはアリーナに落ちてきた、無人機と、サイコ、デストロイがあつた

「……」の「」で運んだんですか？」

「いくらスケールダウンしても、十数メートルはあるんだけど
教師五人で運んだんだ。」の「」は隠し通路があるからそこから運
んだ」「

そんなものまであるのか

「所でそっちの無人機ですけど」

俺はアリーナに落ちたほつの無人機を見る

「ああ、お前もねつ思つか?」

「はい、多分あのウサギがやったんでしょ?」

「それよりもこいつだ」

織斑先生はサイコ、デストロイを見る

「未開発のビーム兵器に陽電子リフレクター、オーバーテクノロジ
ーの塊だぞ」

「ええ、まあそりゃそりゃしちゃうね」

「お前が知つてこることを洗こぎりこ吐け!」

「ええ、だつたら俺の昔話から話さないといけないんですけど。」

「聞いひ」

「その前に確認しますが、絶対に言わないでくださいよ。
話してもいい人は俺が信用した人だけですから」

「分かつた、約束しよう」

「まず、俺はこの世界の人間じゃない」

「なつー? びうー? どだー?」

「もともと俺は、違う世界で普通に生きていた。
そこに車に轢かれそうな猫が、俺はそれをかばい、死亡って感じです
そして目が覚めたらあら不思議、不思議な空間に居ました
そしてそこには神様が居て、俺の助けた猫が神様の親友のペットだ
ったわけです

それでそのお礼って事で俺の世界で見てたアニメのガンダムをIHSにして

この世界に転生させてもらいました。

しかしその時に不具合があって、そいつらみたいなのが出てきた訳です」

「ふむ、確かに信じると言つほしが無理だが、
目の前に居るのだから信じるしかないな」

「ちなみに俺はそいつらをイレギュラーって呼んでますが、
そいつらは装甲が特殊なんで基本的に俺にしか倒せません」

「P.S. 装甲とか、ほとんどのIHSの武器が効かないからな

「わかった、イレギュラーが現れたときは知らせよ」

「とにかく、そろそろ寝ても良いですか？」

「本当に懲罰物だが、まあこの件は許しておけ。」苦労だった

「はい、それでは」

・・・・・・・・・・・・・・

場所は変わつて浴室

「来斗、今日ははずいぶん活躍したわね」

部屋でシャワーを浴びて寝る準備をしてみると
櫛無に言われた

「まあ、な」

「あれは何だったの？」

「まあ、お前なら話してもいいか」

そして俺は織斑先生に話したのと同じ事を櫛無に教えた

「やつだつたの」

「ん、まあ、いつの方が楽しいから良いんだけどな、てかむしろ
感謝してる」

「ふふ、あなたらしいわね」

「まあ、俺は俺だからな」

「それじゃあ、今日は『苦勞様』

チユツ

「お、おいー？ 何をー？」

「今日がんばった」褒美よ

「だからってそんな

「良いから良いから、早く寝ましょう」

うう、いつたいなんだ？ 横無は俺の事が好きなのか？
そんな考えを遮るように睡魔が襲ってきた

・・・・・・・・・

横無サイド

来斗に聞いた彼の秘密、やつぱり驚くけど
嬉しいとも思った、私に秘密を教えてくれたから

それでも、秘密を知つても、もつと、もつと彼の事が知りたい
こんなに人を好きになるなんて初めてだ
凄いどきどきして、凄い胸が苦しい

でも凄くしあわせ
すごく彼が愛おしい

・・・ずっと私と一緒に居てほしい

クラス対抗戦（後書き）

今日も徹夜ですよ。

ほんとテストなんて消えればいいんだ

ちなみにこの小説のヒロインは樋無だけじゃなくシャルもです
まだ樋無しか出てないですが

緊急アンケート（複数用）

今回はアンケートです

緊急アンケート

緊急アンケートです

ええと非常に申し上げづらいのですが、この小説のヒロインを樋無一人に
絞るうかなど思っています

読者の方々も樋無だけの方が良いくて人や、
ここから入れるのは無理がある

などの意見をいただきまして

樋無一人がいいか

シャルも入れるかを聞きたいと思います

もしシャルを入れない場合

IS零式の方が大体ストーリーが出来てるので、
それが完結した後にまったく違う物としてシャルがヒロインのを作
ろうと思います

それについても意見をお願いします

緊急アンケート（後書き）

締め切りは早く続きを書きたいので十一月一十六日にしたいと思います

すこせん昨日のうちに投稿するつもりだったのに出来ませんでした

ヒロイシはアンケートの結果、権無に決定です

そして今回読むとき注意してくださること
・・・何かは聞かないでください

六月頭の日曜日。

俺は樋無との待ち合わせ場所に向かっている
その理由は昨日・・・

・・・・・・・・・・

「ねえ、来斗」

いつも通り部屋でくつろいでいると、不意に樋無に話しかけられた

「ん、なんだ?」

「明日は暇?」

明日か、うーん明日ねえ

「特に用事は無いが

「じゃあ、デートに行きましょう!」

「はあ、びにに行く気だ?」

「ヨイシの事だから知らないで行くのは危険だ

「えーと、服を買って、後は遊園地に行きまよ!」

「意外とまともだったな」

「だつて折角の休日で仕事が無いんだから、楽しみたいじゃない」

俺ら生徒会は休日でも、書類の整理などをしている
・・・本音だけは居ないが、

本音の姉の虚さんいわく、居ないほうが作業が進む、だそつだ
まあ、あの性格だとね・・・

「まあ、別にいいけど」

「ほんとに?」

「ああ、本当だ」

「ふう、良かつた」

「なんだ? 断られると思つてたか?」

「う、まあ、それは、ね」

「まあ、俺も久しぶりの休日で一人つてのも寂しいからな」

一夏は、えーと、弾だつたか。そいつの家に行くって言つてたし
かと言つて他に誘つ奴も居ないし

「それじゃあ、駅前で買い物してから遊園地でいいか?」

遊園地は少し遠いから電車を使って移動しないと駄目だから
時間を考へるとその方が良いだろ?

「ええ、じゃあ八時に駅前に集合ね」

「なんでだ？ 同じ寮で同じ部屋だろ？」

「もう、分かつてないわね」

ああ、雰囲気とかそいつこいつ系か

「ああ分かつた分かつた。」

「なら良いけど。じゃあ、今日は寝ましょー」

確かに遅れると悪いからな

「ああ、そうしようつか

・・・・・・・・・・

つて事があつたから
で、今その駅前では、

『いいじゃん、俺らどどこか行こうぜ』

「すいませんが、人を待つてるんで」

楯無がナンパされていた

つてことで、やることは決まつていて・・・

『そんなやつ、ぐはつー』

助けるのがお約束だろ？

「いやー、いい度胸してますね。人の連れに何してくれてんですか？」

『』

『「の野郎！』

『死ねえ！』

「ああ、共通の言語を持つてないのか。猿か、あんたは？」

そして数分後

『「」、『めんなさい』』

『す、すこません』

「ああ、なんて言つてるの？日本語で話してくれない？」

『キコつ！』

『『ああーーー？』』

『はい、『』の片付けしゅーりょー！

『わあ行ひづぜ、樋無』

『ええ、分かつたわ』

……………

「ま、駅前のショッピングモール【レジナント】

で、今俺達は服を選んでいる

「じつちがいこと思う?」

「櫛無が出したのは、黒のワンピースと水色のワンピース

「やつぱり櫛無こは水色じゃないか?」

「うそ、じゃあわしひこする」

で、服を選びえてから

「他には何か買つものな?」

「えつと、後はブランケットを

ブランケットってあのひざ掛け位の毛布みたいなのだつた気がする

「何に使つんだ?」

「何つて、暖まるのに使つのよ

まあ、確かにそりゃそうだな

「まあ、早いとこ買おうぜ」

遊園地に行く前に少し飯を食つて置きたい

「じゃあ、これにするわ」

「ちょっとでかくないか?」

楯無が持つてきたのは、普通の毛布ほどじゃないけど
かなり大きめのものだった

「この二つのは大きめの方がいいのよ」

「そうか、まあいいんだけど」

「それじゃあ、早く行きましょ」

「ああ、分かったよ」

・・・・・・・・・・

そして会計を終えて、今は昼食を食べに来ている
その店は結構お高い店だが、金は有るから大丈夫だろ?

「じゃあ、私はナポリタンとミルクティーで」

「俺はカルボナーラとアイスティーでお願いします」

『かしこまりました』

「せういえば今度の学年別トーナメントだけやつぱりタッグ戦になるとと思つわ」

「せうか、それで俺は結局どうなるんだ?」

俺も一応副会長だからそういう情報は回つてくれるんだが
お前が出たら絶対優勝じゃなー? つてことで出られるかどうかが分
からなかつた

「えーとね、来斗と私は出たら試合にならないから、
教師と一緒にピットで試合を見てる事になつたわ」

「せうか、まあ仕方が無いな」

『お待たせしました』

と話してると料理が届いた

で、今度は・・・

「はー、アーン」

「あ、あーん

楯無にはいあーんをされてこる
だつてしまつがないじゃん! 横無が左の指をワキワキせんのんだ
もん

「来斗のも一口頂戴

「あ、ああ、あーん」

「あーん。うん、おいしい」

凄い疲れた、いや悪い気はしないけどさ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

でさりに場所は移り遊園地

荷物を入り口で預かってもらい

遊びに行くところで再び問題が発生

「おい、離れて歩けよ」

「カップルは腕を組んで歩くものよ

「まだカップルじゃねえだろ」

それに腕を組むときに自然にその、胸がね
楯無つて標準よりもあるからその、嬉しい感覚が腕に・・・

「ふふふ、どうしたの？顔が赤いわよ？」

しまつたあーはめられたあ！

「なんでもない、さつさと行くぞ

「はーはーこ

それではジエットコースター

「ね、ねえ、これはやめとかない?」

「ほーう、めずらしいな、楯無が慌てるぞ

「駄目だね、もう後ろに結構並んでるし」

「うう、来斗のいじわる」

「大丈夫だつて、ほんの数十秒だから。ほらほら、さつわと乗るぞ」

「・・・分かつたわよ」

とつとう観念したか

ガタンッ!

ロツクの外れる音が聞こえてコースターが動き出す

まずはお約束の上りから始まる、が

その上りの高さがハンパじゃない、上を見上げると首が痛くなる。隣の楯無は相当怖いみたいで、俺の腕にしがみついてふるえている

そして頂点に達すると同時に・・・

ガコンッ!

かなりの高さから九十度近くの角度で落ちる

「うわわわわー。」

凄いGが体にかかる
瞬間は

あ、ヤバイ死んでる

そして無事終わつた

「もう、許さないんだから」

「うるぬうるぬん。あそじめでとは思わなかつたんだつて」

「次はまたたりしたやつにしましょう」

そういうて樋無が指差すのはコーヒーカップ

「わかつたが、あんまり早く回すなよ？」

「分かつてるわよ」

そして乗ると、やはり

ギュワアアアアア！

「止めるおお！ 横無！」

「のす」）速さでカップを回す横無、
「イツ高いのは駄目なくせに回転するのは大丈夫なのかよ

「ふふふ、さつきのお返しよ」

その後はフリー・フォールなどを乗った後、観覧車に乗っている
そういうえば、恋人の相性を見る奴で百パーセントになつたなあ

観覧車で景色を見ていると、横無が話し始めた

「ねえ、来斗」

「ん？ なんだ？」

チユツ

話しかけられたので、振り向いたら横無にキスをされた

「今日は楽しかったわ、ありがと」

「まったく、お前はそんなにキスするつて、俺のことが好きなのか
？」

「え？ そうだけど、知らなかつたの？」

「しりねえよ！ つてことは何だ？」

俺はずつと片思いだと思ってたら両思いだつたと？」

「え？ 来斗は私の事好きだったの？」

「いや、好きじゃない奴にキスされたら怒るだろ？」

「じゃあ、もむろと付き合ってくれるわよね？」

「それは嬉しいが、良いのか？」

「良いって何が？」

「俺は、転生者だし、俺と居たら危ないかもしねいぞ？」

「そんなの聞くまでもないわ、それに危ない時は助けてくれるんで
しょう？」

「ふふ、分かったよ、樋無

「それじゃあ、もう遠慮しなくて良いのね」

「え？ 何をだ？」

「ハハハ」と

ガバッ

樋無が俺に抱きついてきた

「おいおい、キスとかしてたんだから
それくらい普通じゃないか？」

「いえ、ほんとほんとやりたいけど、もひとつに着くから」

「気がつくと既に観覧車はかなり下の所まで来ていた

「やうか、それじゃあ、帰らうか?」

「ええ、門限に遅れたら大変だしね」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その日の夜の自室

「やうこえは来る。」のランケット、いつもある為に置いたのよ

楯無は自分がブランケットを羽織つたまま、俺もブランケットで包み、

その中で抱きついてきた

「やうか、あつたかいな。でもな、

楯無、そろそろ歯止めが利かなくなってきたんだが」

今の楯無の姿は下着だけで、腕を組んだときよつもダイレクトに柔らかさが伝わってくる

「ふふ、でももう我慢しなくてもいいのよ?」

「いいのか？」

「ええ、と言つよつももつと前に襲つてもうおつと思つてたんだか
ら」

「さうか、分かった。でも今夜は寝かさないぜ？」

「でも初めてだから、優しくして、ね？」

「わかんないけど、努力はする」

詳しく述べは書けないが、次の日には買つたばかりの
ブランケットに血と白濁が着いていて、
二人が抱き合つていた

・・・・・・・・・・

橋無サイド

やつと来斗と一緒になることが出来た、
でも来斗も私が好きなんだつたらもつと前に告白すればよかつた
夜の時は最初は痛かつたけど、凄い嬉しかつたな
それに凄い激しかつたな。

・・・・・もつ離さないからね、来斗

はあ、テストで書けなかつた分が今回で出ましたね
いきなり何書いてるんだろ、おれ

一人の転校生（前書き）

今回もちょっとやりすぎたかな?
まあ、大丈夫ですかね?

一人の転校生

「ふああ、ふひ」

いつものように目を覚まし、伸びをする
いつもと違うのは、隣の樋無と俺が一切何も纏つていがない事だろ？
昨日の夜、『ライツを抱いてから事が落ち着いたのは早朝5時で
少しだけ仮眠を取ることにしたのだ
そして現在6時30分、登校まではまだまだ時間があるが樋無を起
こす

「お~い、たてなし~、おきる~」

「う~ん？ 来斗？」

「もう朝だぞ、早く起きろ」

「うと、分かった」

「ねえ、来斗？」

「ん？ なんだ？」

「責任取ってくれるんだよね？」

良かった、いつもより遅く寝たから起きてのうに苦労するかと思つた

ああ、その事か。確かにあそこまでしたからな

「ああ、安心した。ずっと一緒に居てやる」

「うふ、ありがとう」

そういうて抱きついてくる。

俺は抱きしめ返して、優しいキスをする

「来斗、大好き」

「ああ、俺もだよ」

「コンコンー」

「おーい、来斗」

その時、部屋をノックされたのだが、
その時俺は櫛無に夢中で聞こえなかつた、櫛無も同じく・・・

「おーい、入るぞー！」

そういうて入つてくる一夏

その視線の先には抱きしめ合つてキスをする俺と櫛無

「あ、あれ？」

「え？ええー？」

「おーい、一夏いい度胸してくるなー！」

上から一夏、樋無、俺だ

「死ねえ！一夏あ！」

ナイフを持ち、一夏に切りかかる

「おい！？止めひつて！」

「問答無用！」

「ちゃんとノックしただろー?」

「少しば察しのよー！」

「騒がしいぞ！ 何の騒ぎだ？」

言い争つて いると、隣の部屋だつた簞が入つてきた
そして俺は樋無にアイコンタクトをする

『 横無、 築を一夏にぶつけろ、 俺が襲われそうになつたとでも言え
ばいい』

了解

「おのれ一夏あーやはりそっちの趣味があつたのかー?」

「な!? 築!」

「死ねえ！」

「止めるー。」

結局この騒ぎは織斑先生が来るまで続いた、そして帰り際に
「そういう事をするならほどほどにしろよ。
見回りが昨日は私だつたから良かつたが、外に声が聞こえていたぞ」
と言われた

声か、うかつだつたな。

あんまり注意してなかつたぜ

・・・・・・・・・・・・・・

んで今は食堂に櫛無と飯を食いに来ている
すると何人かの女子が話しかけてきた

『あ、あの、二人は付き合つてるんですか？』

『昨日、来斗君と先輩の部屋から、危ない声が聞こえたんですけど』

やつぱり聞いてた人がいたか、寮のトイレは各階の端に有るから
人が何人か通つたかもしれないと思つたけど

「いや、そんなことは・・・」

あんまり広めると櫛無嫌がるかな・・・

「せうよ、私達は付き合つてゐるのよ」

つてええ！？

「おい！楯無！？言つて良いのかよ！？」

「あら？知らなかつたの？私獨占欲が強いのよ？」

「うわ、つるせッ！
しかも喜んでる奴も居れば、めっちゃ沈んでる奴も居る
まったく朝から元気な奴らだ、まあ俺も人のこと言えないけど

「まつたくお前は、まあそんなお前に惚れたんだけどな」

「ふふ、私もよ」

周囲に桃色の空間が・・・

『あ、あの』

『お邪魔みたいなので』

『失礼します』

耐え切れなかつたか

俺も目の前でこんなイチャイチャされると逃げたくなるしな

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

はい、無事？朝食を食べ終えただ今教室

さつき聞かれたことがもう広がってるみたいで質問攻めにあつた

しかし織斑先生の一喝により着席、無事に生き延びることが出来た

「では山田先生、HRを」

「は、はい！ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも一人です！」

「へえー」

『『『ええええええッ！－？？』』』

いきなり転校生が来たとの事で、一気にクラスが騒がしくなる。まあ、気持ちは分かるが

「失礼します」

「・・・・・・・」

そして教室に入ってきた二人をみてざわめきが止まる。

なぜなら、そのうちの一人が - - - - - 男子だつたから。

一人の転校生（後書き）

転校生の話なのに終盤しか出せませんでした・・・
次話はシャルとラウラが登場します

それでもまだテスト後の影響が抜けません・・・
零式は出来れば明日が明後日辺りに出します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8657x/>

IS 転生の翼

2011年11月27日23時00分発行